

論文

民衆知と専門知の相克——パプアニューギニアの農業を例として——

Conflict between Indigenous and Expert Knowledge: A Case of Agriculture in Papua New Guinea

豊田 由貴夫*

Yukio Toyoda

Abstract

There have long been discussions on two types of knowledge in the field of social sciences: indigenous and expert knowledge. Indigenous knowledge is the body of knowledge acquired by local people through the accumulation of experience, or through passing down orally from one's ancestors. On the contrary, expert knowledge is the one acquired in school or academia by learning from teachers. This paper discusses the validity of these concepts, using a case of agriculture in Papua New Guinea.

In Papua New Guinea, gardens are created by slash and burn method. A lot of species are grown in a single plot at the same time. Even when only one species is found in the garden, the people distinguish many types, and they give different local names to each variety. For example, the Kwanga people in Papua New Guinea have 77 of yam, 26 of taro, 65 of bananas, and 9 varieties of sago palm. These crops are differentiated according to their forms, colors, tastes, and agronomic features.

Why these people keep many varieties is not easy to define. The researchers might expect that growing many varieties could minimize the risk of losing the crops to plague. The local people, however, do not agree with this logic. They usually emphasize that they keep so many varieties because they want different tastes. How should the researchers take this contradiction?

It is estimated that there are two ways of understanding the logic. One is that the local people's rationality is similar to the researchers, but with some reasons they do not recognize its meaning now. The other understanding is that their rationality is different from the researchers, and they do not think about ecological, agronomical rationality. They grow many kinds of crops with the other logic, such as enjoying different tastes.

If the researchers use the term 'indigenous knowledge' to explain people's logic, they tend to think that people's logic is irrational and non-systematic, when it differs from expert knowledge. The researchers should be cautious, therefore, in using the term 'indigenous' and try to find local people's own rationality and their own systems in the research area.

*立教大学 AIIC 所員, 観光学研究科教授

Keywords : indigenous knowledge, expert knowledge, Papua New Guinea, folk taxonomy, etic & emic

I はじめに¹

知の体系を分類する方法として、「民衆知」、「専門知」という区分がある。それぞれ学術的な概念として必ずしも確立されたものではないが、これまでいくつかの分野で慣用的に使われてきた²。民衆知は、(エリートではない)一般大衆が日常生活の中で蓄積してきた知識、あるいは伝承されてきた知識や知恵を指す場合が多い。これに対して専門知とは、近代以降、学校教育が一般化したあとで、その学校という教育機関や学界の中で得られた、近代以降の知の体系を示す場合が多い。この二つの知の体系を対比させると、表1のようになる。

表1 民衆知と専門知の性格の対比

	民衆知	専門知
保有者	一般大衆	近代教育を受けたエリート
対応性	個別的	体系的・普遍的
発生の場	日常生活の現場	学界・学校
発生時期	古代から	近代以降
継承法	口承・観察・模倣	学校教育
現場での経験	前提とする	前提としない

対比は筆者による。

このように考えてみると、民衆知は専門知に比べて、現場で蓄積されてきた知識ということから学術的な背景を持たないと考えられ、これに対して、専門知とは現場に関わらない状況で得られた知識であり、個別の状況に対応していないという性格を持つと考えられる。そして、この日常生活の中で蓄積された民衆知は、学校教育の中で得られる専門知と組み合わせることによって、より普遍的な知の体系となるとされる場合があり、これを「市民知」とする考え方もある³。

本論では、このような民衆知と専門知の関係において、両者が対立する場合、あるいは両者の議論が整合しない場合をどのように考えたらよいか、という問題を扱う。民衆知と専門知はその性格の違いから、両者の議論は整合しないことも予想されるが、そのような状況をどのように考えたらよいかを、事例をもとに考えたい。

具体的な事例としてここで取り上げるのは、筆者が調査してきたパプアニューギニアの農業の事例である。この地域では、基本的に根栽農耕が行われているが、単一の区画に同時に多品種の作物を栽培するという農法が行われる⁴。この同一の区画で多品種の作物を栽培するという方法は、単一の品種を広範囲に栽培する方法よりも手間がかかると予想されるが、農学の立場からは、しばしばこれは合理的な栽培法であると言われる。その理由はいくつか挙げられるが、第一に、単一品種を栽培していると、病虫害などで特定の一種が被害を受けた場合、栽培している作物が

全滅する危険があるが、多品種を栽培する方法ではその危険を回避できるという意味で、合理的であると言われる。第二に、多品種を同時に栽培するということは、常時食料が得られるようにするという合理性があると考えられる。単一の品種のみでその収穫時期が定まっている場合は、作物は特定の時期にのみ利用が可能になる。これに対して収穫時期の異なる多数の作物を同時に栽培していれば、常時利用できる作物が確保できることになる。これらの合理性は、近代的な教育を受け、専門知を身につけた者にとっては、正当だと判断できるだろう。

しかし奇妙なことに、現地住民にこのような考え方を確認すると、「我々はそのようなことは考えない」という回答が返ってくるのである。現地住民が多品種を栽培する理由として挙げるのは、「異なる味を求めるため」という理由である。単一の品種だけでは日常の食事で味の変化がないので、多品種を同時に栽培しているというわけである。筆者が農学上の合理性を説明し、このような理由があるので多品種を同時に栽培しているのではないのかと尋ねても、「それはあなたたちの考え方であろう、我々はそう考えない」と言うのである。これが「口ではうまく説明ができないが、そのような説明は我々の考え方をよく表している」という回答が返ってくるのなら、それは「民衆知」が「専門知」の媒介によって普遍的な説明になった、と考えてよいのであろう。しかし、住民は農学上の立場からの「専門知」の説明に対して特に感心するわけでもなく、「それはあなたたちの考え方であろう」と言って、その合理性を意識するわけでもない。異なる味を求めるためという理由（それを「民衆知」とわざわざ呼ぶかは疑問であるが）以外に他の理由を特に挙げることはなく、むしろ「専門知」による農学的な説明を否定するような態度さえとるのである。

このような現象に対して、「専門知」を身につけた農学者たちはしばしば、「それは現地住民がよく問題を理解していないのであり、自分たちのとっている行動を合理的に説明できないのであろう」と考える。しかし、後でも述べるように、この「異なる味を求めるため」と説明する現地住民は、農作物に関する膨大な知識を有しており、それぞれの品種の特徴、収穫時期などを詳細に記憶していて、農法に関して「合法的に説明できない」とは考えられない人物なのである。

以上の事例をもとにして、もう少し問題を一般化してみよう。ある地域を外部の研究者が調査している場合、そこで観察される現象について、研究者による「理解」と現地の人々の「説明」が一致しない場合がある。研究者は自分の「専門知」を使って、現地の現象を理解あるいは説明しようとする。しかし、現地の人々が行う説明（それは「民衆知」を使ってする説明と考えてよいだろう）は、研究者が「専門知」を使ってする説明とは異なるという現象である。

このような場合、一つの考え方は、「専門知」による説明が「正当である」と見なし、現地の住民の説明は「不完全な」、「場当たりのな」ものであり、「合理的ではない」と見なすというものである。現地住民の説明が専門知と異なるのは、住民が現象をよく理解してなく、幼稚であったり、事情を適切に説明できないからであり、専門的な知識と理論を身につければ、あるいは適切に説明する技術があれば、「民衆知」は合理的に説明出来るはずだというわけである。

他方、もう一つの考え方は、「民衆知」という概念を積極的に受け入れる考えであり、それは経験に支えられた、現場の感覚を持った、現地の事情に適合した知識であり、その意味ではその地

域では「正当な」知識であるという論理になる。この場合、専門知は必ずしもその現象には適合しないものであり、外部からの研究者たちは、現地の状況を十分に把握しないまま単純に専門知を適用していたり、あるいはわざわざ「深読み」をして専門知を適用しているというわけである。

実際にどちらの考え方が「正しい」かを判断するのは難しいのだが、本論ではどちらが正しいかという問題を議論するのではなく、このように、具体的な事例において「民衆知」と「専門知」が対立するように見える現象をどのように考えたらよいか、というかを議論したい。

II 多品種栽培

問題を確認しておこう。根栽農耕と対立する種子農耕では、単一の品種を広範囲に栽培することが一般的であるが、これに対して根栽農耕では、パプアニューギニアの事例に限らず、一般的に同一の区画で多品種が栽培され、しかもその品種が非常に細かく分類される。例えばフィリピンではハヌヌ一人が焼畑農耕で栽培している作物として、77種が報告されている [Conklin 1962]。また、タイ北西部のルア人は焼畑で84種の作物を栽培しているという [Kunstadter 1978]。

パプアニューギニアのヤムイモを主食としている地域は根栽農耕を行っているが、畑にはヤムイモの他にタロイモ、バナナ、サトウキビ、野菜類などを同時に栽培しており、そしてそのヤムイモは数十種類に分類されている [Tuzin 1978]。ヤムイモだけではなく、他のタロイモやバナナなども同様に多品種が区分されて栽培されている。やはりパプアニューギニアのセビック丘陵地域のイワムでも同じような報告がされている [吉田 1985]。

多品種を同時に栽培することに関して、それが生態学的に合理的であるということは、これまで言われてきている [Hong 1987]。そしてその分類方法もいろいろ調査されてきた [例えば、Conklin 1962 ; Kunstadter 1978]。しかしここで問題にしたいのは、現地住民がその意味をどのように認識しているか、という問題である。これまでの研究では、現地の状況を観察して、それをどのように解釈したらよいかという研究がほとんどであり、そのような解釈を現地住民に確認して、それが現地の論理に適合しているか、という問題はあまり扱われてこなかった。民衆知と専門知という考え方をとるならば、これまで行なわれてきた研究の多くは、現地で観察される現象について、専門知からの解釈を考えるという立場であり、民衆知をあくまでも知識の集合としてとらえて、背後にある論理や体系を確認するという作業を行ってこなかったのである。そこには民衆知とは、体系立っていない、論理的でないと思なす傾向がある。本論文は、このような多品種を同時に栽培するという現象について、民衆知と専門知という考え方を参照しながら、現地住民が認識している論理について考えてみようというものである。

III 調査地域とその農業

調査地域は、パプアニューギニア、サンダウン (Sandaun) 州 (旧西セビック州) のセイム (Seim) 地区、ワンジャカ (Wanjeaka) 村である (図1, 2 参照)。サンダウン州は人口約14万人、面積約

図1 ニューギニア島

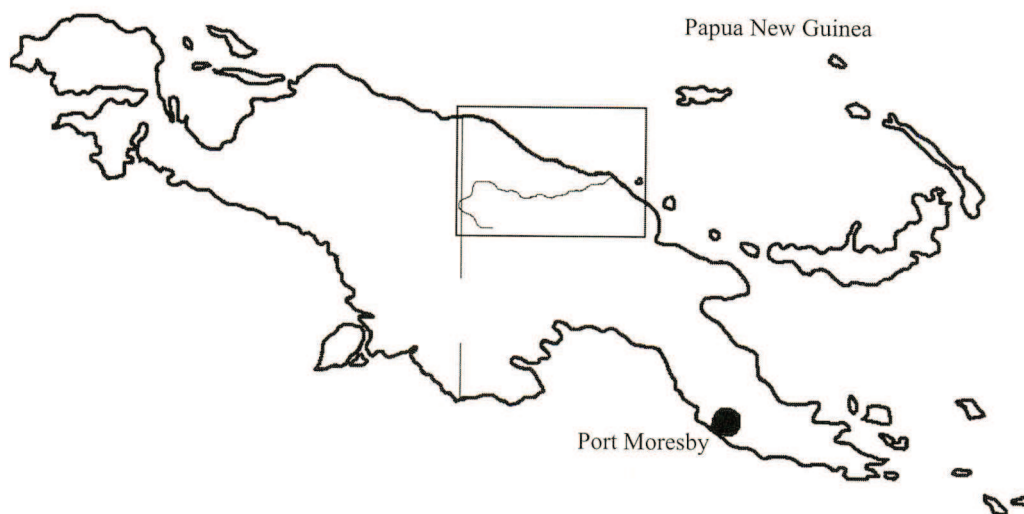
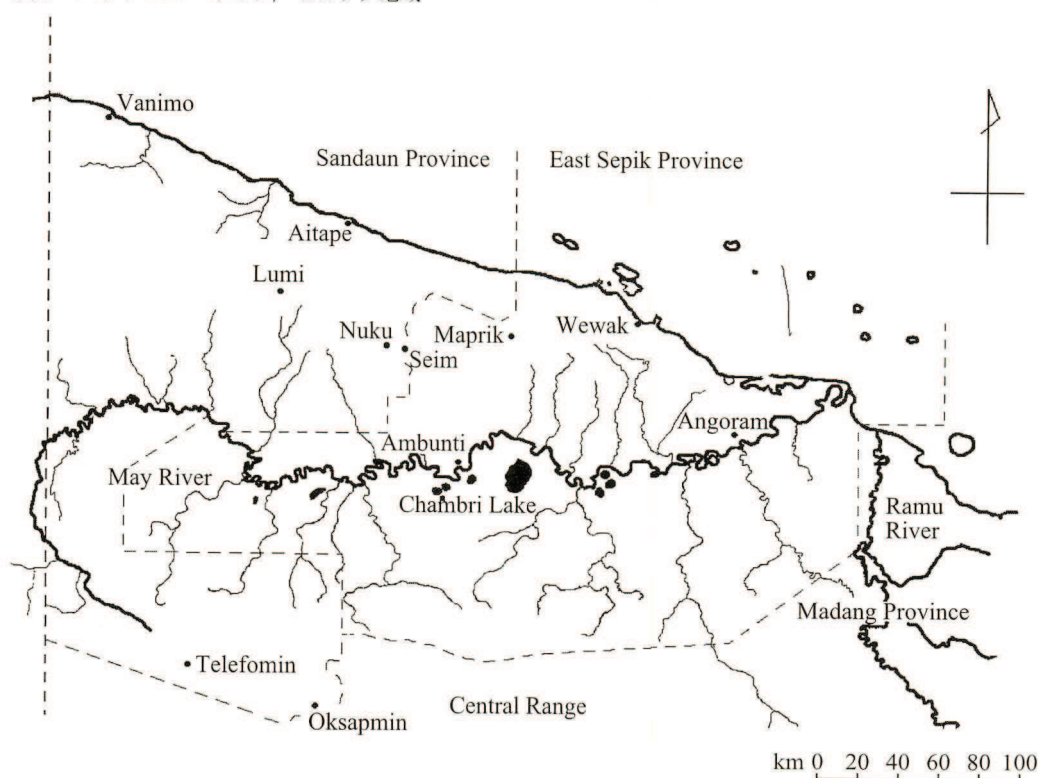


図2 パプアニューギニア、セピック地域



3万6300平方キロメートル、人口密度約3.7人/平方キロメートルである。このうち、セウム地区は1990年の段階で人口4320人である [National Statistical Office 1993]。

ワンジャカ村は世帯が3世帯で住民は約20人である。ワンジャカ村があるセウム地区はトリチエリ (Torricelli) 山脈の山裾にあり、海拔200~300メートル、年間降水量は約2000ミリメートル

である。言語としてはクワンガ (Kwanga) 語を話し、このクワンガ語を話す住民は総人口約1万3000人である。クワンガ語はセピック・ラム言語門 (Sepik-Ramu phylum) のセピック下位言語門 (Sepik sub-phylum), 中流セピック語系 (Middle Sepik stock) のヌクマ語族 (Nukuma family) に属している [Laycock & Z'graggen 1975; Wurm 1982]。

ワンジャカ村での生業の中心は農耕である。農耕のほかに狩猟も行うが、その比重は高くない。農耕はいわゆる移動農耕 (shifting cultivation) であり、畑にヤムイモやタロイモ、バナナ、トウモロコシ、タバコなどを栽培している。1区画の畑を利用すると、別の場所に新しい畑を作り、これを繰り返して15~20年たつと1周して元の畑に戻るといふ。主要な食料はヤムイモであり、他にサゴヤシからの澱粉抽出も補助的に行っている⁵。

IV 作物の民俗分類

ワンジャカの焼畑で栽培される作物は非常に多数に分類される。例えば、ヤムイモはダイジョ (*Dioscorea alata*, 現地語でヤム *yam*)、トゲイモ (*Dioscorea esculenta*, 現地語でマミー *mami*) に区分され、さらにその中でダイジョは39種類に区分され、トゲイモは38種類、タロイモ (*Colocasia esculenta*) は24種類、バナナ (*Musa spp*) は65種類、サゴ (*Metroxylon sagu Rottb.*) は9種類に区分されている (表2)。

表2 ワンジャカ村の民俗分類による作物の品種数

作物	民俗分類による品種数	
ヤムイモ	ダイジョ	39
	トゲイモ	38
タロイモ		24
バナナ		65
サゴヤシ		9

筆者自身の調査による。

これらの区分はもちろん学術的な区分とは独立したもので、現地の住民の独自の基準による民俗分類である。また、区分は現地語で行われているため、この区分は言語集団ごとに異なる。したがって、この区分はクワンガ語を話している約1万3000人にのみ適用できるものである。クワンガ語を話すすべての住民がこのような多数の区分を把握しているわけではないが、多くの住民がこのような区分を把握しており、これらの知識は畑での作業を繰り返すことによって身につく⁶。例として、ヤムイモのダイジョとタロイモの区分を示すと、表3、表4のようになる⁷。現地名での品種名の意味を調べるによりその区分の仕方を知ることができるが、命名の仕方を分類すると表5のようになる。これらのことから、現地の農作物がどのような基準で多品種に区分されているかを知ることができる。

では、どのようにしてこのように多品種が栽培されるようになるのであろうか。住民はもともと基本的に多品種を認識しているのだが、新しい品種の導入に熱心であり、他の地域の作物を積

表3 ワンジャカ村におけるダイジョ (*Dioscorea alata*) の民俗分類

	現地名	性別	名称の意味
1	<i>abmerkongo</i>	m.	色が鳥の色に似ている
2	<i>asanani</i>	m.	犬のような臭いがする
3	<i>bali</i>	f.	Bali(地名)から導入された
4	<i>betu</i>	f.	Betu(地名)から導入された
5	<i>kinjanani</i>	f.	たくさんの芽が出る
6	<i>lisiteye*</i>	m.	手のような形になる
7	<i>lisiteye*</i>	f.	
8	<i>namblo</i>	m.	Namblo(地名)から導入された
9	<i>nokobnani*</i>	m.	女性のヤムという意味
10	<i>nokobnani*</i>	f.	
11	<i>naniabukyalanbai</i>	f.	talagau の羽根に似ている
12	<i>naniafisha</i>	m.	果肉が白い
13	<i>nanibasunuku*</i>	m.	味がよい
14	<i>nanibasunuku*</i>	f.	
15	<i>nanigwasi</i>	m.	daka という植物に色が似ている
16	<i>nanihorkle*</i>	m.	皮がすぐはがれる
17	<i>nanihorkle*</i>	f.	
18	<i>naniili</i>	f.	ナッツのようだ
19	<i>naniniyaka</i>	m.	その葉が月の色に似ている
20	<i>nanirabaul*</i>	m.	Rabaul(地名)から導入された
21	<i>nanirabaul*</i>	f.	
22	<i>nanitambesiki*</i>	m.	ある植物の種のような形になる
23	<i>nanitambesiki*</i>	f.	
24	<i>naniwabi</i>	f.	肝臓(味が肝臓のようだ)
25	<i>naniwapnalo*</i>	m.	赤い naniwabi
26	<i>naniwapnalo*</i>	f.	
27	<i>naniwarumbo</i>	m.	味がキュウリのようだ
28	<i>naniurbla*</i>	m.	tanget(植物)の葉のような葉を持つ
29	<i>naniurbla*</i>	f.	
30	<i>nanixatla</i>	f.	(特に意味なし)
31	<i>obkosumbori</i>	m.	小さいへびのような形をしている
32	<i>rabaul</i>	f.	Rabaul(地名)から導入された
33	<i>sulka</i>	f.	Sulka(地名)から導入された
34	<i>suweriga</i>	m.	イモが固い
35	<i>tambagar</i>	f.	Tambagar(地名)から導入された
36	<i>tombounani</i>	m.	下方から導入された
37	<i>wasnani</i>	f.	白人の所から導入された
38	<i>wasnanisunja</i>	f.	石のようにイモが固い
39	<i>yarwayi</i>	m.	森林で見つけられた

注：性別は m. が男性、f. が女性を表す。* を付けたものは男性と女性がある。この男女の区分についてはここでは説明しないが、詳細は豊田(2003)を参照。

出所：筆者自身の調査による。

表4 ワンジャカ村におけるタロイモ(*Colocasia Esculenta*)の民俗分類

	現地名	性別	名称の意味
1	<i>yagorombuknalo</i>	f.	Yagorombuk(地名)から導入された赤いタロ
2	<i>yagorombuk</i>	f.	Yagorombuk(地名)から導入された
3	<i>sabafai</i>	f.	短い葉を持つ
4	<i>makam</i>	f.	Markham(地名)から導入された
5	<i>tarui</i>	f.	(特に意味なし)
6	<i>abkumbu</i>	f.	葉がコウモリの形をしている
7	<i>nasikunasi</i>	f.	(特に意味なし)
8	<i>hafarnasi</i>	f.	Hafar(人名)が導入した
9	<i>nasisikakre</i>	f.	(特に意味なし)
10	<i>nasimankubya</i>	f.	ある種の木のような
11	<i>oskins</i>	f.	Hoskins(地名)から導入された
12	<i>kanabuku</i>	f.	West New Britain(地名)から導入された
13	<i>arubanjasi</i>	f.	(特に意味なし)
14	<i>nasimurongo</i>	f.	Murongo(地名)から導入された
15	<i>nasiukumbungwar</i>	f.	(特に意味なし)
16	<i>nasiopmisa</i>	f.	葉柄の色がへびの皮の色に似ている
17	<i>imbrangen</i>	f.	Imbrangen(地名)から導入された
18	<i>kuwanganasi</i>	f.	Kuwanga(民族名)のタロの意
19	<i>kindam</i>	f.	葉柄の色がエビを茹でた時の色に似ている
20	<i>nasiwarsihi</i>	f.	パンノキの実に似ている
21	<i>nasixoko</i>	f.	ジャガイモのような
22	<i>nasiapsambarke</i>	f.	オウムの羽のような色をしている
23	<i>angarnasi</i>	f.	Angar(地名)から導入された
24	<i>aloweinam</i>	f.	Weinam(地名)から導入された

注：性別は m. が男性, f. が女性を表す。*を付けたものは男性と女性がある。この男女の区分についてはここでは説明しないが、詳細は豊田(2003)を参照。

出所：筆者自身の調査による。

表5 ワンジャカ村の民俗分類による作物の命名法

命名法	具体例
形態	手のような形になる
	下から芽が生えてくる
	子供のように小さい
	果肉が白い
外観の特徴	色・大きさなど
	イモが乳のような色をしている
	葉柄がへびの皮の色に似ている
	色が鳥の色に似ている小さい
似ている動物など	へびのような形をしている
	葉がコウモリのような形をしている
	早く料理ができる
	皮がすぐはがれる
食用上, 加工上の特徴	スープにすると味が良い
果実や実の付き方	実の数が少ない
導入方法	導入者、導入元の地名
その他	単なる名称で意味が不明の場合など

注：同様な、パプアニューギニアのタロイモの命名・区分法については、小西他(1994)を参照。
出所：筆者自身の調査による。

極的に導入しようとする。他の地域を訪れた際に、新しい品種・作物を知ると、できるだけそれを獲得しようとする。しばしば、自分が持っている品種・作物と交換してそれを獲得し、自分たちの畑で栽培を試みる。また、結婚の際には女性が男性の村に移る場合がほとんどであるが、その際に女性が自分の地域で栽培している作物を持ってくることがしばしば行われる。このようにして他の地域から新しい品種が導入されるのだが、新しい品種に有用性がない（味が悪いなどの理由により、特別導入する必要性がないと考えられる場合）ということがわかると、それ以降は栽培しないようになる。したがって現在栽培され認識されている品種は、このような選択の結果残ったものだ、ということになる。

V 多品種を同時に栽培する論理

では、次に多品種を同時に栽培する行為に関して、現地住民はどのように認識しているのだろうか。多品種を同時に栽培することは、近代農業の理論からは合理的な行為だと説明されている。これは熱帯の変化しやすい環境への適応であり、病虫害などによって特定の作物が利用できなくなった場合の危険を避けるためだ、そしてさらには一定の時期だけではなく、常時食料が得られるように配慮されているというわけである。しかし前述したように、住民が示した多品種栽培の理由というのは、異なる味を求めるため、というものであった。

専門知からの論理と考えてよい、多品種を栽培することによって危険を回避できるという論理に対して、現地の住民はどのように考えるのであろうか。この考え方は、単一品種を栽培している場合だと、病虫害などである一種が被害を受けた場合、栽培している作物が全滅する危険があり、多品種を栽培することによってその危険を回避できる、というものである。いわば、多品種栽培は干ばつや病虫害に対する「保険」だという考え方である。しかし、パプアニューギニアの現地住民にこのような理由から多品種を栽培しているのかと質問をしても、そのようなことは考えないという回答が返ってくる。前述したように「それはあなたたちの考え方であろう、我々はそう考えない」というのである。実際に病虫害によって特定の品種が被害を受けるという現象がどれくらい頻繁に発生するかは、資料が得られていない。考えられるのは、このような現象がそれほど頻繁でないために、十分に認識されていないという可能性である。

専門知の立場から多品種栽培をする第二の理由として考えられるのが、常時、食料が得られるようにするためというものである⁸。異なる品種を栽培することにより、それぞれの品種の収穫時期がずれ、これによって収穫の端境期がなくなるという効果がある。しかし、多品種を栽培することは、それぞれの品種の収穫時期をずらして常時食料を得るために行っているのか、という問いに関しては、これもそのようなことは考えていない、という回答であった。住民の反応は何か変なことを訊いている、というものであった。現地住民は作物ごとの植え付け時期と収穫時期を十分把握している。このことから考えられるのは、彼らは収穫の端境期をなくすためには、むしろ植え付け時期を調整することによってこれを達成しているということである。確かに、収穫の端境期をなくすということは、現地住民は十分考えているのだが、これは植え付け時期を調整

するという別の方法で達成されており、そのために多品種を同時に栽培しているという認識はしていないようである。パプアニューギニアでは、ヤムイモなどごく一部の作物を除いては、原則として作物の栽培に適切な季節があるわけではなく、いつ植え付けを行うかは、住民自身が決定できる。したがって、わざわざ品種による収穫時期の違いを考えなくても、植え付けの時期をずらすことによって常時食料を得られるようになるのである。

結局、住民が理由として示すのは、異なる味を求める、という理由だけである。毎日、同じ味だと飽きるために、多くの品種を栽培して毎日違う味を楽しむのだと言う。確かに、現地では調理方法はそれほど種類があるわけではなく、調味料の種類も決して多くはない。ヤムイモの場合、調理法は皮をはいでココナツミルクで煮るか、あるいは焼くか、蒸すかの3種類であり、調味料としても、塩が時折使われるだけである。違う味を楽しむために多くの品種が必要であるというのは、これらのことから十分理解できる。

この異なる味を求めるという理由が、多品種栽培に対して住民が示す唯一の理由であり、他の理由としてこちらがいろいろな考えを示して、このようなことも理由になるのではないか、という質問を行っても、住民から同意の回答は得られないのである。

VI 近代農業の論理と現地の論理

以上のことから明らかになったのは、外部の研究者が現地住民の行動に対して「合理的」な面があると考えても、現地の人々は必ずしもそのような理由は意識していないという奇妙な現象である。外部の研究者が推察するような、危険を回避するためという論理や、常時、食料が得られるようにという論理を現地住民は考えず、彼らが語るのは、異なる味を求めるためだという理由だけである。毎日、同じ味のものばかりを食べていると飽きるので、飽きないように多品種を栽培するのだという。そして、危険を回避するためという論理や、常時、食料が得られるようにという論理に対しては、そのようなことは考えない、という回答が返ってくるのである。民衆知・専門知という考え方を取り入れるならば、専門知の考え方と民衆知の考え方が異なるということになるのであろう。

このような状況はどのように解釈したらよいのであろうか。専門の立場から推察する論理に対して、あるいは専門を学んだ立場からの論理に対して、その行為を実際に行っている当の住民が、それは違う、というのである。

このような問題に対して、おそらくは二つの解釈が可能であろう。一つの解釈は、外部の研究者が合理的と考える説明と現地住民の合理性は重なるはずだと考えるものである。現地住民の行為は、もともとはその合理性を追求するためになされた行為だが、その合理性は現在の現地住民には明確な形では意識されていないのだ、という考え方である。もともとは危険を回避するためとか、常時、食料が得られるようにと考えての行為だったのが、いつの間にかその理由が忘れ去られ、行為だけが残っているのだらうという考え方である。確かに、ある習慣の存在理由を、その習慣を行っている人すべてが把握しているとは限らない。現地で様々な習慣に対してそれを

行っている理由をたずねると、もっとも頻繁に返ってくる答えは「昔からやってきたから」あるいは「先祖がやってきたから」というものである。その習慣の存在理由は、習慣を行っている人に質問をして得られるとは限らないので、このように、もともと存在していた理由が忘れ去られたのだと考えるのは、一定の正当性はある。民衆知・専門知という考え方を使えば、民衆知では十分説明がされていないが、専門知によって説明がされた、ということになるのであろう。

他方で、別の解釈も考えられる。現地住民が語るように、近代的な農学の合理性は意識されておらず、単に結果として外部の研究者が合理的と考える現象が生じているだけだ、という考え方である。多品種栽培について言えば、現地住民は単に異なる味を求めめるために行っているだけであり、結果として危険回避や常時食料が得られたりする効果があったりするだけであり、外部からの研究者が現地住民の行為に対して、無理矢理に近代農業の合理性を読み取ろうとしているのだ、という考え方である。この考え方だと民衆知と専門知は異なっており、一致していないということになる。

パプアニューギニアに見られる多品種栽培について、「危険を回避するため」や「常時食料を得られるようにするため」という理由によって説明することは、専門知を身につけた者にとっては合理的に見える。しかし現地の住民がそれを否定しており、そしてその住民が、農業に対する膨大な知識を有しているのを知る時、安易に専門知の立場からの説明を受け入れてよいのかは、疑問が残る。現地の住民は（すべてではないが）作物を詳細に区分し、それぞれの品種が様々な成長段階であってもそれを区分し、それぞれの特徴を正確に身につけているのである。このような人物が自分たちの行っている農業の方法について説明できない、というのは考えにくいのである。そこには専門知の立場から、民衆知を「体系立っていない」、「幼稚な」、「自らの行動を説明できない」として単純に決めつけてしまっているのではないか、という疑問が残る。

民衆知・専門知という対比の仕方には、専門知が学問を行っている立場からのものであるという点を考慮して、民衆知に対する専門知の優越性が背後に見える。民衆の知恵は、確かに現場の体験、長い経験から得られる知であるという強みはあるのだが、それは体系立っていない、論理的でないという特徴があり、それは学術的、理論的な、体系だった専門知によって初めて補うことができるという考え方が見てとれる。

VII エティックとイーミック

この問題を整理するために、民衆知・専門知の対比と類似する、別の概念を参照してみよう。

言語学の考えを応用して文化を分析するための概念となった、エティック (etic) とイーミック (emic) という考え方がある。言語学者の Pike が提唱した概念であり [Pike 1967]、これは音声学 (phonetics) と音韻論 (phonemics) との対比という言語学上の概念を、文化の対比に応用したものである。各言語で音の単位と見なされる音素 (phoneme) は、発話される環境によって音声学的に変化し、その言語で音韻論的には同一の音と見なされる場合でも、外部の観察者の立場からは音声学的には別の音となる。例えば、日本語の「たちつと」の子音は音韻論的には一つの

音素として考えるべきだが、音声学的には [t] [tʃ] [ts] という三つの音になる。日本語の内部から見た音韻論的な体系と、外部の観察者から見た音声学的な体系とは異なることになる。これを文化の分析に応用し、音声学的 (phonetic) と音韻論的 (phonetic) の「音」を示す phon の音節を取って、etic, emic とし、文化を分析する場合に、外部から見た体系をエティック (etic) とし、内部の体系をイーミック (emic) としたのが、この考え方である。

観察者の立場と被観察者の立場の対比という性格から、エティックとイーミックは民衆知・専門知の対比と重なる。観察者の立場からのエティックと専門知、被観察者の立場からのイーミックと民衆知という性格である。しかし、エティックとイーミックは、現場と専門における知の体系の対比と言うよりは、文化を外から見るか (エティック) 内側から見るか (イーミック) という側面が基本であり、いずれにも「体系」があるのが前提となっている。この点で、現地の知識・知恵を「体系がない」と見なす傾向のある民衆知・専門知の区分とは異なる。

また、エティックとイーミックの対比では、多くの個別のイーミックの体系を学ぶことにより、それらを分析・記述するためのエティックの概念も豊かになると考える。例として言語での事例を示すと、入破音 (implosive)⁹ はアジア・アフリカの一部の地域で見られる音であるが、空気を流入して破裂させることによって音声を出す。空気を流出させて音を出す場合がほとんどであるのに対して、珍しい発話法である。このような音の存在が知られなければ、個別言語の分析・記述において、破裂音の破裂が空気を吐き出すか吸い込むかによって区分するという基準はできなかった。入破音という音が特定の言語に観察されることにより、言語一般を分析・記述する音声学の分析法が豊かになり、多くの言語を分析できることになったわけである。音の破裂には外破 (explosive) と入破 (implosive) という対立があり、この区分を音の分類の基準に加えることによって、分類体系は豊かになり、音声学の基準はより包括的になる。この意味では、多くの言語を調査してそれぞれの音韻論の体系を調べることにより、言語を比較するための音声学の基準が豊かになり、多くの個別言語を分析・記述できるようになる。

同様のことが文化の分析にもいえる。個別の文化の体系 (イーミック) を調べることにより、それを分析・記述するエティックの概念も豊かになる。このようにエティックはイーミックを分析するためのものという性格が強いが、イーミックからエティックへのフィードバックがあることにより、これがエティックの体系を豊かにし、多くの個別事例を分析することができるようになる。

Pike (1967) は、エティックとイーミックの対比において、最終的な記述はイーミックな記述であり、すべてのイーミックの追求が終わった後にエティックの包括的な記述が可能であるとしている。これは言語の分析を想定しているからであろうが、体系が複雑であり、分析基準が多数考えられる文化の分析においては、最終的なエティックの記述が可能であるとは考えにくく、イーミックからエティックへのフィードバックは絶えず行われると考えた方が適切であろう¹⁰。

以上のようなエティックとイーミックという考え方を参照すると、民衆知・専門知という考え方の性格が明らかになる。エティックとイーミックが外からの分析、個別の記述という対比になり、そこには同じ現象に対する異なる見方という性格を持ち、両者の間には優位性は存在しない。

前述したように、Pike 自身はエティックはイーミックのために存在すると考えているが、以上のようなことを考慮するとむしろ文化の分析法に二つの異なる方法があると理解した方がよいであろう。これに対して、民衆知・専門知という対比は、現場と専門という、その知識を得られる場の違いから、被観察者への観察者の優位性を想起させる。民衆知は、あくまでもエリートではない一般大衆が日常生活の中で蓄積してきた知識であり、専門知は近代教育を受けた者が持つ知識ということになり、専門知の民衆知に対する優位性が前提となる傾向を持つ。

VIII 民衆知・専門知あるいはエティック・イーミック

ここで問題にしたパプアニューギニアの多品種栽培について、住民がいかにして今のような考え方に至ったのか、もともとは別の意味があったのにそれが忘れられて「異なる味を求めるため」という意味だけが残ったのか、あるいは外部の研究者が考えるような意味はもともと無く、純粋に「異なる味を求めるため」という意味があっただけなのか、現在では推測することしかできない。また、このような意味づけは地域によっても異なる可能性もある。パプアニューギニアの地域でも差があるのかもしれない¹¹。

問題にしたいのは、どちらが「正しい」とかどちらの説明が有効であるということではなく、民衆知・専門知という区分を行い、現場で住民が語る説明に対して、民衆知というレッテルを貼ると、民衆知はあくまでもエリートではない一般大衆が日常生活の中で蓄積してきた知識であると考えことから、それらの知識・知恵に対して、一定の傾向の考えを持つようになってしまう危険性があるということである。それが「非論理的」であり、「体系的でない」ということを前提としてしまう危険性があるということ、ここで指摘しておきたい。

まず民衆知・専門知という区分を行うと、一般大衆が日常生活の中で蓄積してきた知識・知恵は、分析者あるいは専門知の保有者の補助によって初めて普遍的な知識となりうる、という前提を考えてしまう。民衆知それ自体は普遍的な知識とはなり得ず、専門知があつて初めて普遍的な知識となると、あらかじめ見なして調査・研究を進めるという危険性が生じる。

そして、一般大衆が日常生活の中で蓄積してきた知識・知恵は、体系的でなく、非論理的であり、それは分析者あるいは専門知の保有者でなければ説明できないもの、と見なす傾向が出てしまう。そこからさらに、現場で観察された現象に対して、安易に専門知を適用することの危険性や、「深読み」をしつたりする危険性がでてきてしまう。

今回扱ったパプアニューギニアの農業の事例のように、現場での知識・知恵に対して専門家の知識がそのまま有効になるかどうか、問題はそれほど単純ではない。一般大衆が日常生活の中で蓄積してきた知識・知恵には独自の体系、独自の論理がある可能性もあり、またそれにより専門知がより深く豊かになる可能性をも秘めているのである。

その意味では、分析者は一般大衆が日常生活の中で蓄積してきた知識・知恵を、体系がない、非論理的な知識・知恵と見なすことなく、そこに体系を見いだし、論理を見いだすという作業を絶えず続ける姿勢が必要であろう。そしてそれを専門の知識に反映させる作業を、絶えず続ける

姿勢が必要であろう。民衆知とされる現場の知識・知恵は、専門知とされる専門家の知識・知恵の助けによって分析されるのを待っているわけでは決してない。民衆の知識・知恵は、それを深く学ぶことにより、専門の知識・知恵をより深く、体系だったもののできる可能性を秘めているのである。

〈註〉

1. この論文の内容は、主として以下の調査に基づいている。東京農業大学の創立100周年記念海外学術調査(1991年, 1992年), 科学研究費補助金(63041138, 02041101, 16401032, 19401043)。また、この他にこれまで行ってきた数度の現地調査で得られた知見がもとになっており、これらの現地調査は石坂記念財団、大和銀行アジア・オセアニア財団、日本熱帯農業学会のサゴヤシ特別研究委員会の研究助成を受けている。特に東京農業大学の創立100周年記念海外学術調査に二度参加したことは、本論文を書く際に大きな刺激を受けた。ここであらためて関係者に感謝したい。
2. 民衆知は indigenous knowledge の訳語であるが、対立する概念としては専門知の他にいくつかある。科学知 (scientific knowledge) と対立させる場合もあり、また教育学の分野では、学校知 (school knowledge) という概念が使われている [安彦 1998]。ここでは専門知を仮に expert knowledge としておくと、必ずしも用語は定着していないようである。また、local knowledge という語は人類学者の Geertz によって特殊な意味合いを持って使用されている [Geertz 1983]。
3. 例えば立教大学の研究所 AIIC の研究理念 (<http://aiic-rikkyo.org/program/index.html>)。
4. ここで取り上げたパプアニューギニアの農業の詳細については、豊田 (2003) を参照。本論における農業の記述の部分は、豊田 (2003) とかなり重なっていることをあらかじめ断っておく。
5. パプアニューギニア、セビック地域の農業の概略については、豊田 (1997) を参照。
6. 近年、若者は畑で過ごす時間が短くなっているのも、このような知識をあまり身につけていない。その原因としては、学校に通うようになったこと、また学校を卒業した後、都市で過ごすことが多くなったことなどが挙げられる。
7. ここでは一例としてダイジョの区分のみを示したが、タロイモ、バナナ、サゴヤシなど他の作物でも、同様に多数の品種が区分され、名称を与えられている。詳しくは豊田 (2003) を参照。また、現地名の表記法については Brison (1992) を参考にした。ただし現地名については十分確認ができていない点もあり、ここでの表記は仮のものとする。
8. 豊田 (2003) では、多品種栽培に対する農学上の理由として、第一に常時食料が得られるようにとの理由、第二に危険回避の理由を示したが、危険回避の方が今回の問題の本質に関わると考え、本論では危険回避の理由を第一に挙げている。
9. 入破音を示す implosive は、無解放閉鎖音 (unreleased stop) である内破音を示す場合もあるが、ここでは空気を流入させて破裂音を出す場合を示している。
10. 同様な考えは吉田 (1984: 64) にも示唆されている。
11. 高橋・豊原 (2005) はパプアニューギニアのセビック地域で見られる同様な現象について、別の見解を述べている。

〈参考文献〉

日本語

安彦忠彦編 (1998) 『学校知の転換：カリキュラム開発をどう進めるか』ぎょうせい。

小西達夫・豊原秀和・横山宏明 (1994) 「パプアニューギニアのタロイモ」東京農業大学創立100周年記念事業実行委員会『秘境パプアニューギニアに農耕の起源を探る』所収、東京農業大学創立100周年記念事業実

行委員会, 40-63頁。

高橋聖和・豊原秀和 (2005) 「パプアニューギニア・東セビック州における在来農業にみられる地域性」日本熱帯農業学会『熱帯農業』第49巻第5号, 270-279頁。

豊田由貴夫 (1997) 「パプアニューギニア, セビック地域における農業開発実施上の文化的・社会的課題」日本熱帯農業学会『熱帯農業』第40巻第1号, 27-36頁。

豊田由貴夫 (2003) 「パプアニューギニア, セビック地域における多品種栽培の論理」吉田集而・掘田満・印東道子編『イモとヒト: 人類の生存を支えた根栽農耕』所収, 平凡社, 95-111頁。

吉田集而 (1984) 「エティックとイーミック」和田祐一・崎山理編『現代の人類学3 言語人類学』(現代のエスプリ別冊) 所収, 至文堂, 62-77頁。

吉田集而 (1985) 「パプアニューギニア, イワム族の農耕に関する民俗分類の予備的報告」国立民族学博物館『国立民族学博物館研究報告』第10巻第3号, 615-680頁。

英語

Brison, K. J. (1992). *Just Talk: Gossip, Meetings, and Power in a Papua New Guinea Village*, Berkeley, University of California Press.

Conklin, C. H. (1962). "An Ethnoecological Approach to Shifting Agriculture" in A. P. Vaida (ed.), *Environment & Cultural Behaviour*. Austin, University of Texas, pp. 221-33.

Geertz, Clifford (1983). *Local Knowledge: Further Essays in Interpretive Anthropology*, New York, Basic Books, Inc.

Hong, E. (1987). *Natives of Sarawak: Survival in Borneo's Vanishing Forests*, Institute Masyarakat, Malaysia.

Kaberry, P. M. (1941-2). "The Abelam tribe, Sepik District, New Guinea: a preliminary report" *Oceania*, 11, pp. 233-58, 345-67.

Kunstadter, P. (1978). "Subsistence Agricultural Economics of Lua and Karen Hill Farmers, Mae Serieng District, Northwestern Thailand" in Peter Kunstadter, E. C. Chapman and Sanga Sabhasri eds., *Farmers in the Forest: Economic Development and Marginal Agriculture in Northern Thailand*. Honolulu, East-West Center, pp. 83-84, 87-89.

Laycock, D. C. & J. Z'graggen (1975). "The Sepik-Ramu Phylum", in S. A. Wurm ed., *Papuan Languages and the New Guinea Linguistic Scene*, Canberra, Australian National University, pp. 729-63.

National Statistical Office (1993). *1990 National Population Census Final Figures, West Sepik Province*, Port Moresby, National Statistical Office.

Pike, Kenneth L. (1967). *Language in relation to a unified theory of the structure of human behavior*, the Hague, Mouton.

Toyoda, Y. (2002). "Socio-Economic and Anthropological Studies Regarding Sago Palm Growing Areas" in Kainuma et al. eds., *New Frontier of Sago Palm Studies*, Tokyo, Universal Academy Press, pp. 15-23.

Tuzin, D. F. (1972). "Yam Symbolism in the Sepik: An Interpretative Account.", *Southwestern Journal of Anthropology*, 28, pp. 230-54.

Tuzin, D. F. (1978). *The Voice of the Tambaran: Truth and illusion in Ilahita Arapesh Religion*. Berkeley and Los Angeles, University of California Press.

Wurm, S. A. (1982). *Papuan languages of Oceania*, Tuebingen, Gunter Narr.